ダイバーシティ実現に向けた幼児期からの教育プログラムの開発
－障がい者スポーツを活用した障がい理解教育の幼児向け実践プログラム開発と展開－

東洋大学　ライフデザイン学部生活支援学科子ども支援学専攻　南野奈津子他

- ◆ 次世代を担う子どもたちが多様性について理解を深めることは、社会のダイバーシティ実現を支える源になる
- ◆ 幼児対象の障がい理解教育の実践や知見は少ない
- ◆ 実施されているものの多くは「絵本の読み聞かせ」体を動かして学ぶ形式は少ない
- ◆ 子どもたちは「多様性を尊重し、人のありように合わせて創造されたスポーツ」である障がい者スポーツを活用した障がい理解教育を通じて「個性を尊重しつつともに生きる力」を培うことができる
- ◆ パラリンピックの成功は子どもへの教育と一体 ➡
- ◆ **本プロジェクトでは、障がい者スポーツや運動遊びを活用した幼児向けの障がい理解教育プログラムの開発を行う**

絵本の読み聞かせが中心
http://style.nikkei.com/article/DGXMZO81189520S4A221C1000000?channel=DF260120166497&style=1

すでに実施している機関もある
（2019年2月　川副氏シンポジウム資料より）

情報共有はあまりされていない

ロンドン大会の成功を陰で支えたのが「ゲットセット」という教育プログラム。学校で競技体験やパラアスリートの訪問を行い、パラリンピックに関連した教材を複数の教科で扱った。生徒たちは次第に興味を持ち、アスリートと交流したり、競技を体験したりしながら、気がつけば応援したくなっていた、というような仕組みがちりばめられていた。

　チケットを買った人のうち、75%は家族連れの観客だったそうだ。互いを尊重し、支え合う共生社会は、彼ら彼女らにとっては十分到達可能なゴールだと思う。ロンドン同様、家族で応援したくなるような戦略が、東京も成功の鍵になりそうだ。

（2017/6/9　日本経済新聞朝刊「子どもの『見たい』が原動力」）

マセソン美季氏
（パラリンピックメダリスト）

プロジェクトの展開

本研究の価値：「ダイバーシティを尊重する社会の実現」
「スポーツと幼児向け障がい理解教育の融合」
「パラリンピックのレガシー形成」

2018年（H30）：調査研究

国内：文献研究
　　保育所・子ども園・幼稚園への大規模調査
海外：文献調査

↓

2019年（H31）：障がい理解教育プログラム開発

保育園・幼稚園でのトライアル実施・効果検証
国際シンポジウムによる知見の共有と合評

↓

2020年（H32）：実 践 モ デ ル 完 成

ツールの完成・発表・研修実施・配布

↓

2020年　東京オリンピック・パラリンピック

↓

障がい理解教育プログラムの継続実施によるレガシー構築

学会発表・論文執筆による国内外への発信

保育・幼児教育機関が行う障がい理解教育の実践の現状、その効果や課題を明らかにするために保育所・幼稚園・子ども園2000機関にアンケート調査
→この規模での調査は初めて

⬇

- 障がい理解教育を実施している機関は34.6%
- 「絵本の読み聞かせ」が最も多く、対象年齢は4・5歳児が中心
- 実施をしない理由としては「専門知識や技術の不足」が最も多い
- 約７割が今後障がい理解教育、そして運動遊びを使った障がい理解教育の実施を検討したいと回答

障がい理解教育に関するシンポジウム

日時：2019年2月2日（土）
共催：朝霞市
後援：明石書店　童心社
　　一般財団法人健やか親子支援協会

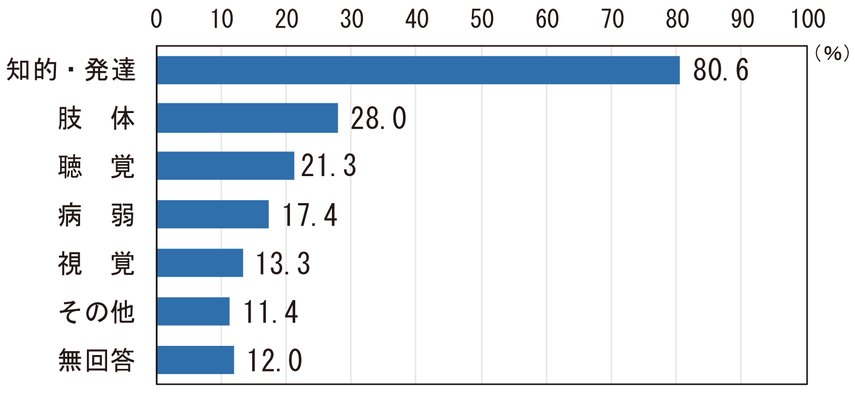
【研究チームメンバー】
南野奈津子・嶋崎博嗣・高橋直美・中原美恵・山原麻紀子・高山静子・鈴木崇之・高橋健介・内田千春・伊藤美佳・田尻由起・田村知栄子
早坂聡久・金子元彦・川合正

障がい理解教育の実情と課題：アンケート調査より

保育・幼児教育機関が行う障がい理解教育の実践の現状、その効果や課題を明らかにするために保育所・幼稚園・子ども園2000機関にアンケート調査を行った。

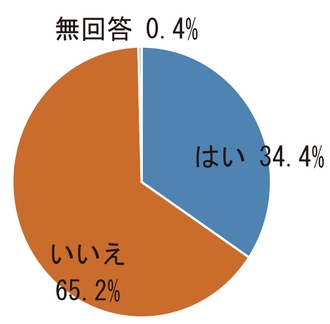
・対象：東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県、茨城県、栃木県、群馬県の保育所・幼稚園・子ども園、計2000 機関
・調査期間：平成30年7月1日～平成30年7月31日
・有効回答：465（23.3%）

【機関で受け入れている子ども】



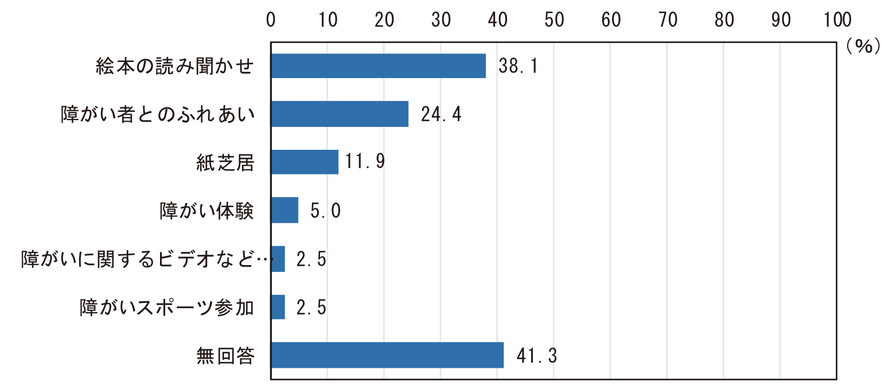
約8割の機関で障がいを持つ子どもが入所

【障がい理解教育の実施の有無】



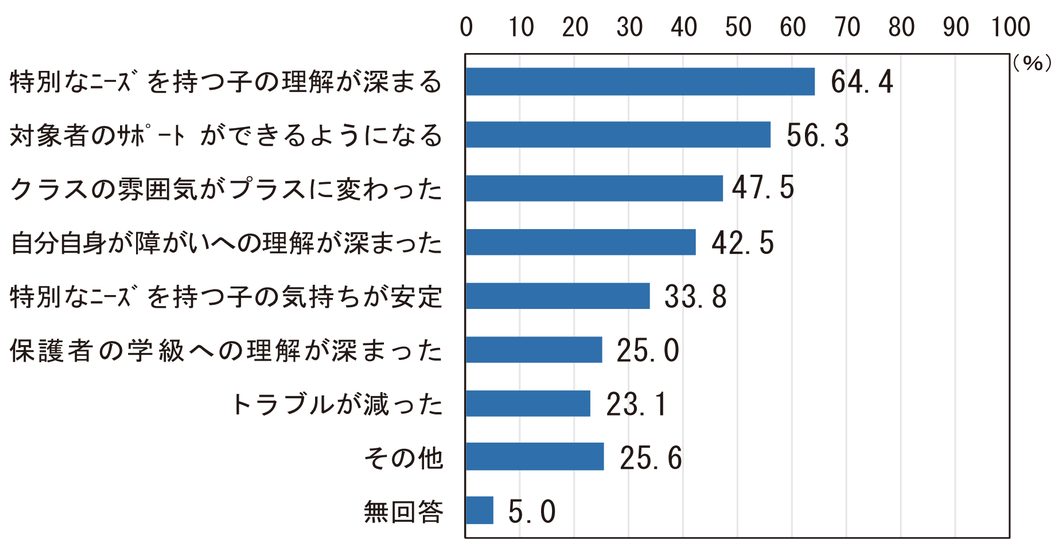
対象の多くは4・5歳児

【障がい理解を深める活動の内容】



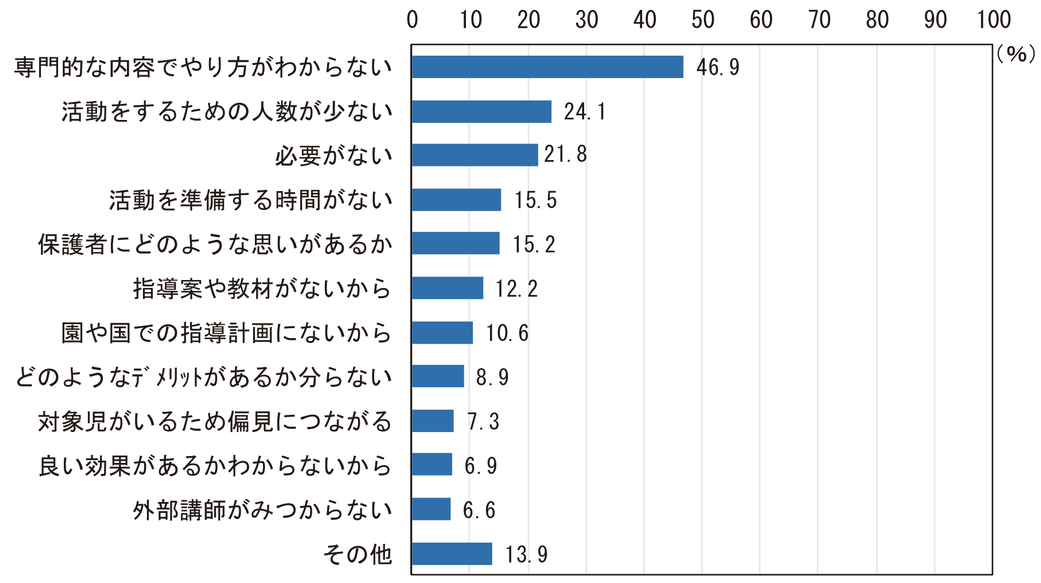
絵本の読み聞かせが中心

【障がい理解教育を実施した効果：全体】



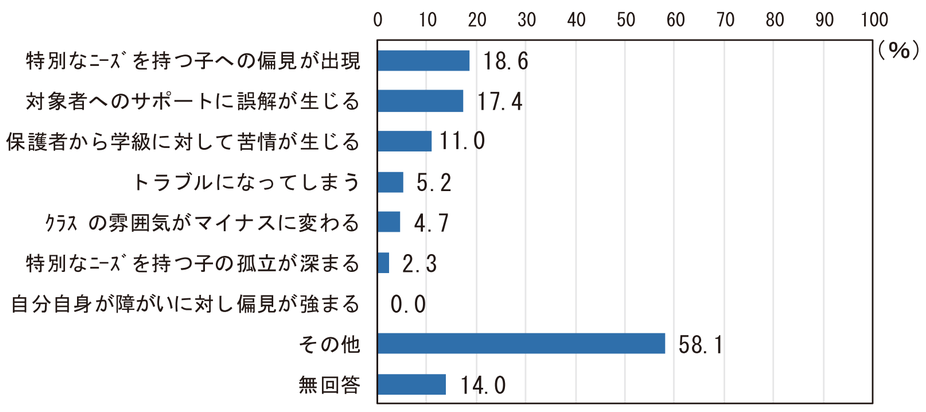
・「回答者自身の障がいへの理解が深まった（42.5%）」など、大人の発達観の広がりのほか、「特別なニーズを持つ子の気持ちの安定が図られた（33.8%）」、「保護者の学級への理解が深まった（25.0%）」など、子ども・保護者・保育者が多様性を基盤とした共生観へ変容

【障がい理解教育を実施しなかった理由：全体】

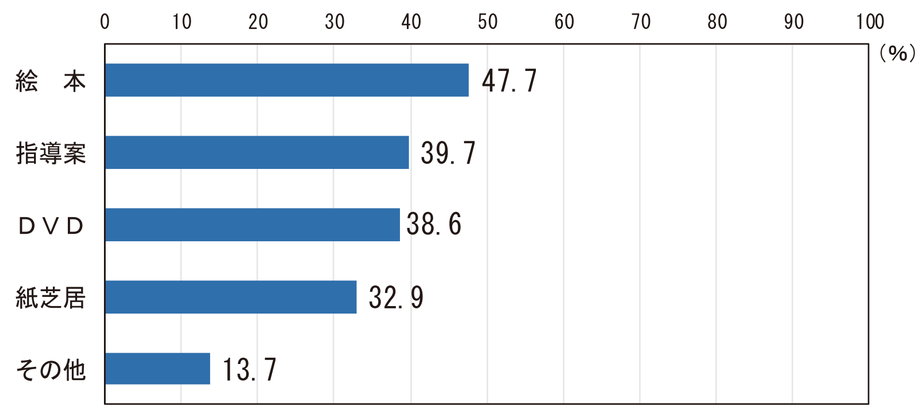


・障がい理解教育を実施していない理由として保育者の障がい理解教育に関わる知識や経験不足を最も多く指摘
・「日々の関わりの中で学ぶことを大切にしている」という記述も多く寄せられた

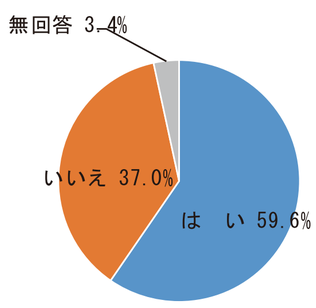
【障がい理解教育実施の際に予想されること】



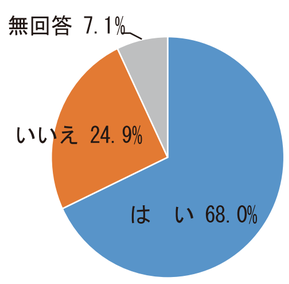
【実施の際にあったらよいと思うツール】



【今後障がい理解教育を実施したいか：全体】



【運動遊びを活用した障がい理解教育の実施意向】



【実践してみたい運動遊び】（複数回答）

足の動きを制限した遊び	105
手の動きを制限した遊び	118
声を出すことを制限した遊び	135
聴覚を制限した遊び	106
視覚を制限した遊び	129

動的な手法を学びながら障がいや人の個性についての学びを促進したいとの意見が寄せられた